

近世紀行文紹介(その八・東北・北陸紀行の部)

板 坂 耀 子

(平成六年九月十二日受理)

今回は東北・北陸地方を中心とした紀行文を紹介する。

ただし東北地方については、この他にも蝦夷へ向かう紀行文の多くがこの地方を通過しているため、それらの作品の一部にも東北紀行が含まれていることが常である。しかし、そういった作品については、蝦夷紀行として別の機会に紹介することとしたい。ここではあくまで旅の目的地が東北地方であり、記事の大半が同地に関わっているもののみについてとりあげることとする。

東北・北陸地方の紀行文として、まず挙げられるのはいうまでもなく松尾芭蕉の「おくのほそ道」であろう。近世の紀行文として最も、というより唯一よく知られているこの作品は、あまりにも有名であるため、あえてこの目録からは省いている。ただし、ごらんになればおわかりのように一部のものを除いてはこれらの紀行文に、特に「おくのほそ道」の影響は見出せない。けれど、それだからなおのこと、「おくのほそ道」に登場する地名や記事に関する資料としても、これらの作品類は貴重であろう。これらが翻刻されて、充分に利用される時が待たれる理由の一つである。

秋保日記(富田以実・中塚広茂)

宮城県立図書館KM2921ア2。写本一冊。仮綴、共表紙。24・8×16・8cm。十二行書、六丁。一部破損。「寛延四年、公務のいとまあるころ、城西の秋保村にまかりて温泉に浴し侍らんとて」と冒頭にある。八月三日から十五日に至る日記。固有の地名があまり登場しない。仙台の近辺のみの、一種の近郊紀行文。漢詩や和歌などを交え、風景や土地の人々や旅のさまを描写しているが、いずれもあっさりして、眼前の風景が多く、詳しい資料や考察はない。

磯づたひ(只野真葛)

帝国文庫「続紀行文集」所収。文政元年八月、塩釜から舟で付近の海岸を巡ったときの珍しい話について記したもの。鯨、鰐、亀のことなどを讀本風の文章で、奇談風に記す。

磯まくら(源則満)

宮城県立図書館KM2951イ1。24・3×15・9cm。六行書。

十二丁。茶色表紙。左肩白題簽。「元文三孟冬上旬 日即堂如衡」の奥書がある。裏表紙裏に「昭和六年九月拾一日 今泉臺州先生寄贈」とある。相の関、石巻、風越峠、鮎川、黒崎、金華山、を経て、萩の浜から船旅となり、飯屋を浜に建てて鹿狩りなどをする。その後、牡鹿の郡を通過して仙台に着く。和歌を交えて記述は簡単だが、一種の格調がある。主君に従っての紀行で、海辺や船旅の記事が多い。八月末から九月初の紀行である。

越中紀行草稿(田中大秀)

高山郷土資料館香木園文庫紀行部10号。写本一冊。九丁。十行書。

茶色表紙。左肩青題簽。27・4×19・5cm。外題「越中紀行草」。内題「越中紀行草稿」。文化四年五月六日から九日にかけて、奈良から二上山、伏木、池田、清水、海若、高岡を巡る。内題の前に草稿が五丁ある。短い旅行で、まだ未整理のところもあるが、なだらかな優雅な筆致で、土地の風俗など、よく描いている。

江戸より盛岡まで道法(作者不明)

宮城県立図書館所蔵。K29011。写本一冊。江戸日本橋から盛岡までの地名と距離を記し、簡単な説明を加える。道中記風の簡単な記述だが、中には珍しい記事もある。末尾には馬の駄賃表なども付している。

従江戸至仙台行程記(田辺希分・首藤知平)

宮城県立図書館所蔵。KD290112。写本一冊。26・4×17・3cm。共表紙で左肩白題簽。五十五丁。藤原清令・保定が「甲申の夏」

に写した旨の奥書がある。江戸日本橋から日光街道を通過して、杉田、桑折、越河などを経て仙台に至る。ただし日光には参詣していない。「○ヨリ○○迄」と項目をたて、距離を記し、記事を記す。「おくのほそ道」の影響はないが、このしろのことなど共通する記事が多い。内容は軍記物や説話などを中心に豊富で正確で、面白い。個人的な記事や卑俗な記事はない。末尾に道中の距離、日程のメモがあり「信友」と署名がある。その後に「浜街道駅路」として、文化七年春の東都登りの節のことを同様の形式で記すが記事はずっと簡単である。更にその後文化八年の鹿島行きが記されるが、これも簡単である。

江戸より仙台までの道中案内(作者不明)

宮城県立図書館所蔵。K2901エ3。写本一冊。11・9×18・0cm。青色表紙。題簽なし。五十四丁。道中記風の記述だが、字体はかなり整っている。貞山公についての記事が多い。

江戸道中記略(藤原知平)

宮城県立図書館所蔵。KD2901エ5。写本三冊。14・5×20・5cm。青色表紙。左肩白題簽。十三行書。第一冊四十四丁・第二冊五十九丁・第三冊五十丁。元禄十年首藤弥兵衛、藤原知平の序文がある。横本だが字はよく整い、極めて堂々とした構成。仙台からはじまって江戸へ進んでいる。松島の記事はない。地名と里程を記し、古歌などもよくあげ、案内記として有用である。「おくのほそ道」の資料としても貴重であろう。ただし影響はまったくない。なお、同図書館のKM2901エ512は25・7×17・1cmで十一丁、仮綴で後半が欠落しているが、内容は同一である。

〔江戸より仙台までの道の記〕(作者不明)

無窮会図書館所蔵。写本一冊。宮城県立図書館キテ290-12の田辺希文の「從江戸至仙台行程記」と内容はほぼ同一だが、異同も非常に多く、なお検討する必要がある。冒頭に地図を付す。

塩松勝譜(舟山万年)

宮城県立図書館所蔵。KM292-12-10-1。十冊。明治四十年刊行の活字本である。

遊塩松記(吉見幸和)

「遊松島塩釜記」とも。宮城県立図書館KM292-21。写本一冊。25・8×18・8cm。黄土色表紙。七行書、五丁。延享三年成。漢文紀行。塩釜から松島へ行き、見物している。風景描写が丁寧だが、全体としては記事は少ない。

塩松紀行(古梁南山)

「仙台叢書」十一所収。宮城県立図書館KM292-11に写本一冊。青色表紙。左肩白題簽。23・1×15・5cm。文化六年、安内から燕沢、今市を経て、壺碑、松島を遊覧する。気のおけない友人たちとの松島観光。作者自身はすでに五、六回同地に遊んでおり、松島論が随所に出る。描写も細かい。末尾に絵図と漢詩を記す。松島のこと以外の記事はあまりない。

奥羽紀行(松原庵星布尼)

岩手県立図書館所蔵。板本一冊。寛政九年。作者は鳥酔門の俳人。鯖

野や武隈の松、壺碑、平泉を経て、最上川、吹浦、弥彦山、出雲崎に至る。発句が中心で簡単な前書が各句についている。後半は歌仙を集めたもの。

奥羽紀行(宮川直之)

函館市立図書館所蔵。00290-671-4001。写本一冊。白色表紙。左肩打付書。24・0×16・9cm。十行書。百五丁。嘉永二年、中嶋久太夫写の奥書がある。天明元年の跋。奥羽と松前の旅日記。

奥羽紀行(行雲)

作者は西角庵一方入道行雲。刊本一冊。天理図書館綿屋文庫所蔵。明和二年。自序に芭蕉のことを記し、冒頭に餞別の句多し。京都から出発、近江、美濃を経て東海道に入り、大井川を避けて秋葉山を越える。江戸からの出発の時に、また餞別の句多し。松島から象潟まで行くが、すべて記述は簡単に描写はあつさりしている。作者六十九才の時の旅。蝶夢の跋あり。

奥羽紀行(藤河漁介)

大阪府立図書館所蔵。写本一冊。享和元年自序。五月十日過ぎ、人に誘われて出発を決意し、水戸、仙台、松島、平泉などについて記す。平泉の説明で終わるが、最後に細字で出羽の銀山についての記事がある。冒頭は地図が多く、本文に入ると、地誌的な文体で詳しく、更に上部の余白に細かく注記を入れる。その注記は途中からなくなり、記録的になって来る。また、地名ごとに江戸よりの距離を注記する。「此国の風土并見聞を書記す。予、諸国漫遊せし癖有りて、さきに西遊記を図して播作

因伯及備前備中其外西国之内、記せし事あり。只、我心がけて後の便りとする事ハ、其国、其鄉村に至りて田畠并材木染楮紙澹蚕、其外物産之品々悉記せり。別而金銀銅鉄製法諸商之便りとせる事漫筆せり。同好人あらば是をみるべし」などと記しているように、やや雑多で記録的だが、内容は豊富で面白い。

奥羽行記（秀圃）

東京大学附属図書館酒竹文庫所蔵。板本二冊。明和元年。序文に芭蕉のことを言う。しかし「おくのほそ道」のように「文おもしろく」は書けぬと断った上で、具体的に細かく丁寧に行路の風物を記す。各所で「おくのほそ道」を引用、検討し、その影響は強い。江戸から出発し、芭蕉と同じコースを辿る。那須余一の記事は芭蕉よりずっと詳しい。典拠は不明だが、しばしば非常に詳しく物語風に伝説などを記している。軍記物や歴史に強い興味を示すが、佐藤兄弟の嫁の墓については芭蕉の記述を読み違えている。土地の人の生活もよく描かれ、挿話も面白い。青森まで至り、水戸まで戻るところで一冊目が終わる。二冊目は歌仙や絵図を集めたもの。文字摺石の絵などもある。旅の心得や、各地の名物、行程表も収めている。「おくのほそ道」の副読本として利用できるだろう。

奥羽日記（吉岡良太夫）

鶴岡市立図書館所蔵。内題・外題ともに「吉岡良太夫奥羽日記抄」。明治二年二月十日から四月六日にかけて、水戸から白川、福島、仙台を通じて、鶴岡、黒川、二本松に至り、会津地方を巡って帰る。わかりやすい文字と明確な飾らない文体で、土地の情景をよく描いている。他に

見られない記事も多く、当時の様子がよくわかり、資料としても貴重だが読み物としても面白い作品である。

奥羽の日記（梅至）

大谷篤藏氏の翻刻あり。宝暦五年、「おくのほそ道」の跡を辿って、奥羽から江戸に至る。発句が中心。かめわり坂や出雲崎、羽黒山、吹浦、象潟までの記事が乾巻、最上川、宮城野、壺の碑、松島、白河、那須、日光、江戸までが坤巻の二巻である。板本「両回笠」の乾巻部分の稿本という。

奥羽道記（丸山可澄）

無窮会図書館所蔵。写本一冊。元禄四年三月十二日から六月六日まで、平泉から青森まで行き、弘前、大館、温海、天童、米沢、白河、黒羽を経て水戸に帰る。片仮名と漢字の簡略な記録文で事実を正確に記している。早い時代の作品として貴重である。

奥羽名所の記行（石井修蔵）

国会図書館所蔵。写本一冊。文政十二年。のちの人の枝折のために記すと自序に記している。作者は筑波の人で、五月二十五日、親友の川柳法師とともに出立する。記述は発句をまじえて、歯切れよく詳しい。それほど長い記述はないが、記事は具体的に珍しいものが多い。平泉から月山、湯殿山、酒田、象潟に至る。帰途は山形を通じて、福島、白河を通じて。象潟は、すでに陸地となっており、ここで「おくのほそ道」を引用する。行程も、ほぼ「おくのほそ道」にしたがっている。

奥州一覽記(湖十)

東京大学附属図書館所蔵。写本一冊。天保十二年。道中日記そのものか、日付に従って行程、地名などを示すが、走り書きで読みにくい。八月二十四日に江戸を出発、福島を経て、松島付近は記事がやや詳しく「海上風にて眺望殊くよし」などある。九月八日に平泉、九日に一関に至り、二十日に帰宅している。折々に発句が交じる。

奥州紀行(富田伊之)

「南部叢書」六所収。安永六年、江戸から日光を経て、みちのく見物へ出発。松島や鳴子を巡って帰着する。山隠という法師と同行。冒頭に「蒼生子」の餞別の歌がある。飾り気のない、ユーモアを交えた文体で、旅の実情や人々のさまを生き生きと記している。相撲取りのこと、宿の食事のことなど、珍しい記事も多い。

奥州筋巡見自分日記(作者不明)

「国書総目録」には、天明八年、四冊本として、国会図書館の所蔵となっているが、現在行方不明である。

奥州話(只野真葛)

「女流文学全集」三所収。「狐とり弥左衛門」「柳町山伏」「乙」「猫にとられし盗人」「龍燈のこと」など二十七の項目をあげて、奥州にまつわる伝承や記事を紹介している。同じ著者の「磯まくら」と共通する形式で、こちらの方が一つの話が短くて、記述もややあっさりしている。読みやすく、面白い内容である。

奥州道の記(風々狂人無名子)

東北大学附属図書館狩野文庫所蔵。写本一冊。享和二年写。仙台に住む作者が、江戸への道すがらのことを書きつづったものと冒頭に言うが、記述は江戸日本橋から始まって仙台に至っている。項目を立てて地名と距離を紹介している。発句もまじるが、記録的で、やや雑な感じもする。しかし義経関係の伝説や、名物のメモなどもあり、内容は面白い。

奥羽名所図会(作者不明)

宮城県立図書館KM292-1オ1。折本一冊。33・0×43・0cm。享和三年三月。塩釜の菅原茂三郎蔵板。絵図入り。松島のことを詳しく記す。芭蕉をはじめさまざまな紀行文を引用している。「興嶋」のことを紹介。

奥往来(百明)

「校註俳文学大系」紀行編所収。天明四年。江戸から銚子、鹿島、香取を経て、水戸、岩沼、仙台、松島、鮎川、金花山、象潟をめぐる仙台に戻り、岩沼、伊達、瀬の上を通って江戸に帰る。俳文紀行にしては文章が中心で、まじめでしつとりしており軽妙さは少ない。「おくのほそ道」のあとを慕っており、引用が多い。瀬の上付近からは病気になる。

奥のあら海(小磯其女)

帝国文庫「続々紀行文集」所収。花山院家の姫君に仕えていた著者が、結婚した姫にしたがって松前家に行き、数年を過ごす、姫が出産の折りに母子ともに亡くなったため、京都に帰る折りの作品と冒頭にある。

松前から三馬屋に渡り、平泉や白川を経て江戸に着き、東海道を京都に帰る。非常に長途の旅だが、記述は簡単で、それほど長い作品ではない。しかし三馬屋付近の部分はあまり紀行文の無い地域でもあるので珍しい。姫君のことをしので泣く場面もあるが、過度な感傷につつまれておらず、道祖神の像を見て皆で笑う記述などもある。

奥の行脚(秀国)

東京大学附属図書館所蔵。「奥の行脚」の外題を記した題簽は後に補ったもので、内容は「奥羽行記」(秀国)の刊本の下巻と同一。

奥のえたち日記(五郎川某)

東北大学附属図書館所蔵。写本三巻一冊。明治元年、公命により、みちのくの戦いに出征したときのもの。戦闘の記事が多く、珍しい内容。九州の松浦から出発している。和歌を交えた、わかりやすい和文である。

奥の紀行(夜食房夜来)

「南部叢書」六所収。句が多く記述は簡単だが、洪水のことなど面白い記事もある。交流した人々の名も多く出る。師の重厚とともに、宮古島周辺から八戸、田名部、末松山、盛岡などを巡ったもの。八月三日から九月八日までの旅だが、年代は不明。作者は盛岡の俳人という。

おくの紀行(紀正敦)

静嘉堂文庫所蔵。写本一冊。宮内庁書陵部所蔵の文化四年の二冊本「みちのく紀行」に内容は同じである。

奥の小日記(児島青房)

「校註俳文学大系」紀行編所収。刊本一冊。享保十七年刊。三月十一日に京都を立って東海道を江戸に至る。途中、秋葉山に参詣。江戸からは日光街道を通り、遊行柳、浅香山、文字摺石などを見て塩釜神社に参詣、松島を見る。帰途は仙台を経て日光参詣、江戸からは木曾路を通って京に帰る。短い紀行だが文章の部分が長く、「すべて奥道に馬はあれども、老てはあぶなく、道にうみて心ぼそく、此所よりはしきりに帰らん事のみ思はれ」などの記述や独特の記事があり、テンポもいい。

奥の道の記(屋代野川)

鶴岡市立図書館所蔵。写本一冊。作者は松山藩の家老屋代得右衛門最房の養母で、白川邸に長いこと奉公していたが、老年になったため暇をもらって最房とともに松山に帰る時の作と、冒頭に説明がある。江戸から日光街道を通って、白川に至り、日本松、福島、尾花沢を経て最上川を下り、帰着する。わかりやすい和文で見聞をつづっており、佐藤継信の城のこと、最上川の仙人堂のことなど、他にはない珍しい記事も多い。

奥濃道富美(西園主人)

京都大学附属図書館所蔵。写本一冊。絵図が多い。「蝦夷の命」を受けて三月二四日に江戸を出発して、蝦夷地へ向かう。飾り気のない正確な文体で、土地の風俗や自然の実態について記している。四月七日、花巻に着いたところで終わっている。作者は松江長伯で長い紀行の一部のようである。

奥遊日記(池川春水)

清水孝之氏の翻刻の活字本あり。明和八年三月二十日、友人と二人でみちのくへの旅に出る。安房から江戸に行き、日光街道を通り、日光にも参詣する。白河、福島、瀬の上付近までが上巻、その後、桑折、藤田、岩沼、仙台を通して松島を見物し、詳しく記述している。次いで石巻、金山山、平泉に至るまでが中巻、更に山の目、一関、月立から桑折に戻り、福島、芦沢、岩城、水戸、鹿島、筑波をめぐって江戸に着き、浦賀から和田へと帰っている。長編で詳しく、記録的だが個人的記事もあり、名作の一つである。

をしまのたまや(陽春庵)

活字本がある。東北、北陸を遊覧しており、特に松島の記事が詳しい。記述はあっさりしており、優雅な和文である。

気仙遊乗(斎藤馨)

宮城県立図書館所蔵。KM296-1ケ1。写本一冊。仮綴、表紙。左肩打付書。十行書。九丁。朱入り。漢文紀行。弘化丙午、七十九才の作者が九月六日から二十六日にかけて、気仙付近の名勝を見物したもの。武隈の松、佐藤兄弟の墓、金華山、泉蔵寺、碁石の浜、鬼来などを日を追って記している。それぞれの記事の内容はかなり細かく面白い。

こし地紀行(磯一峰)

帝国文庫「統紀行文集」所収。元禄申(五あるいは十七)年、播磨から越後へ、幼君の領地替えにともなって供をしていく。大坂までは舟旅。北陸路で金沢に入り、富山を通して柏崎、出雲崎を経て、越後の村上に

着く。和歌と漢詩を交えて、歯切れいい文章で綴っている。風景描写も多い。土地の風俗への観察や、自己の見解などもある。名作の一つである。

越廼陸記(五三亭桐丸)

東京大学附属図書館所蔵。写本一冊。24.0×16.6cm。十三行書。四十七丁。海老茶色表紙。左肩白題簽。慶応二年の奥書がある。冒頭の序文に紀行文論がある。同じ序文では松島のことは特になく、むしろ能因法師と白河関を意識している。ふく井町から天王橋、駒川から千住に至り、以後は日光街道を通るが日光には行っていない。白河から鳥井峠、八木山、津川、新発田を経て新潟に至り、同じ道を白河に戻り、宇都宮を通して帰着する。和歌が多く、文章はなだらかで細かい。文学的だが俗事も記し、食べ物のことなども出て、旅の日常がよくわかる。ユーモアもあって面白い。

塩釜巡覧記(相原友直)

「仙台叢書」二所収。冒頭は漢文。塩釜神社の説明をし、簡単に由来を記す。他は付近の名所の説明と、古歌をまとめるのみ。紀行文とはいえない。

塩釜名所古跡弁(作者不明)

宮城県立図書館KM292シ1。写本一冊。仮綴、表紙欠落。20.0×15.0cm。刊本の稿本か。書き入れ多し。二十二丁。枠のある紙に名所図会風に記している。記述は簡明だが明確で、参考になる。青葉山、つつじが岡、宮城野、壺の碑、奈古曾関、松島、野田の玉川、末

の松山、金華山などの説明。土地の名物なども記す。狭い範囲のもだが、よく知っている人の書いたものようである。

照顔斎道の記(曲草)

国書総目録になし。柿衛文庫所収。内題「奥の細道を慕ふ照顔斎道の記」。嘉永元年三月、茂助という供をつれて、「おくのほそ道」の跡をたずねる旅に出発する。軽妙な挿絵と発句が多い。字はかなり読みにくい。三月四日に大坂の伊丹を出立、京都から東海道を経て、江戸に到着、滞在する。日光には茂助が行きたがったのと、たまたま御神事だったので立ち寄り、以後白河の関を経て松島や壺の碑を巡って、往路と同じ経路で五月二十五日に帰宅する。歯切れのいい文章で、土地の人のさまや旅の実態を描いており、珍しい記事も多い。

蝶の遊(山崎北華)

帝國文庫「続々紀行文集」所収。元文三年。芭蕉の「おくのほそ道」の跡をたどっている。三月二日に江戸を出発、日光街道、二本松、壺碑と芭蕉と同じ行程で進むが、松島で夢に芭蕉と会って、象潟には行かずに引き返し、五月九日に江戸に着く。漢文めいたやや派手なめりはりの文体。歯切れよく旅中の見聞を記す。やや技巧的。松島の部分は詳しく、風景描写を行っている。

つばのいしぶみ(連阿)

「連阿著作集」所収。宮内庁書陵部「扶桑残玉集」二十五の内。盛岡から衣が関、松島や武隈の松、日本柳、あさか山、那須野、鍋掛、室八島など巡って江戸に帰る。奥書はないが享保頃の作か。つばのいしぶみ

のことは「石のかたちまでうつしとめた」ので末尾に記すとあるが、存しない。中心は松島か。ならかな和文で、簡単な記述のようだが味わいがある。故事や伝説にしばしばふれる。

東奥紀行(長久保赤水)

「日本儒林叢書」三所収。宝暦十年成、寛政四年刊。「探北越七奇記」を付す。漢文紀行。頭欄に注多し。七月五日、常州赤浜を出発、壺の碑、松島など巡り、石巻に着いた七月十二日で終わる。挿絵があり、絵をまじえた風景描写が非常に詳しい。漢詩もある。旅の実態、土地のさまざまな、細かく面白い。野馬の記事などもある。

東奥紀行(山口凹巷)

中野三敏先生所蔵。板本二冊。文化十年序。享和三年九月、河良佐が江戸に使せんとするに同行して、東奥に遊ぼうとし、伊勢から東海道を進む。途中、良佐と別れて鎌倉に遊覧。十三日に江戸に着く。北条霞亭と会う。十七日、江戸を出発し、日光を経て、白河、福島と進む。医王寺、壺碑など見て、松島に遊び、四日に松島を立ち、五日石巻、六日登米を経て平泉へ行く。霞亭は同行して、このころ足を病む。その後、勿来の関へ行き、神岡、森山、水戸を経て鹿島に参詣、江戸に帰る。以上が第一冊。第二冊は、すべて旅中の詩をまとめる。記事は、細かく詳しい。具体的に無駄がなく、東北紀行の一つの典型として広く読まれたであろうことが予想できる。

東奥紀行(作者不明)

国会図書館所蔵。165/106。写本一冊。11.9×16.7cm。

ほぼ十八行程度書。三十四丁。朱色表紙。左肩白題簽。外題・内題ともに「東奥紀行」。奥書はない。蝦夷地まで達している。松島の記事はない。なお、同図書館の「道中案内記」198/205、165/106は、この本と内容が同じである。同名の198/205「国書総目録」では同一の書として挙げる）とは、内容がよく似ているが瀬の上の前に「東鑑」を引用しているなど、異同も多い。

東奥紀行（作者不明）

国会図書館所蔵。198/205。写本一冊。13.1×19.1cm。十六行書。五十丁。墨付四十四丁。茶色表紙。中表紙（厚表紙）は青色。左肩打付書。外題「奥のし（以下判読不可）」。内題「東奥紀行」。地名を記し、戸数や村名をあげて行く。しばしば伝説なども紹介する。珍しい記事も多い。平泉の記事が詳しい。三馬屋から箱館へ渡る。箱館は地名のみで終わる。末尾に「日光山強飯實詞」を付す。

東北遊（藜菴庵青岐）

「南部叢書」六所収。写本一冊。寛政六年、播磨付近から出発し、京を経て伊勢、名古屋、木曾路、中途から東海道に移って江戸に入り、鹿島から松島に詣で、平泉から酒田、ねずの関、敦賀を通して京に出て帰る。長途の大旅行だが、句が中心で記述は簡単、全体も短い。ねずが関付近で土地の女性二人の淳朴さに感心した記事がある程度。解説によると栗本玉屑と同行していて、玉屑の「あづま貝」と出入りがあるという。

東北遊日記（吉田松陰）

「吉田松陰全集」原典版七・普及版一〇に所収。嘉永四〜五年。十二

月四日に江戸を立ち、白河から会津を経て、新潟、佐渡、酒田、弘前、青森、一戸、盛岡、平泉、今市、日光、栃木、足利を通って江戸に帰る。長途の大旅行。漢文調の歯切れいい文体で日付を追って記して行く。宮部鼎蔵、安芸五蔵と同行。記述は結構詳しい。漢詩をしばしば詠む。人名が多く出る。長久保赤水の記事もある。各地の軍制、官制などに興味をもって詳しく記す。はりつめてドラマチックな旅の様子が感じられる。社会批評も多い。

東北遊日記（宮部叢蔵）

「吉田松陰全集」原典版一〇に所収。嘉永四年、吉田松陰、江幡五郎と同行した時の漢文紀行。二人との交流がよく描かれ、緊迫した状況下の旅を楽しむのがうかがえる。断片のみだが、風景描写、伝説、土地の生活など、簡明な中によく記されている。

勿来日記（中村順蔵）

無窮会図書館所蔵。神習文庫7047。写本一冊。17.3×24.3cm。茶色に白の縦縞模様表紙。十六行書。二十七丁。朱が少々入る。「明治十三年四月嘱篠原千馬氏写」直澄舎主人春山醉民の奥書がある。文久三年三月、幕府が旧臣に謁見の礼を行うため出立し、足利学校から喜連川に行く。同地で行事を終えた後、黒羽、雲巖寺、野口、太田、平潟、勿来関、水戸、結城を経て、足利に帰る。漢文紀行で全丁に美しい淡彩画があり、特に海の色が良い。風景描写や伝説など、記事も詳しく、人々との交流も記す。

八戸紀行(渡辺益庵)

「南部叢書」六所収。万治三年。南部山城守重直の侍医である作者が、主君の鷹狩りに随行したときのもの。短いもので、鷹狩りの記事も特になが、冒頭に盛岡の町について述べ、作者の生活ぶりなど記しているのが面白い。

丙午出羽日記(則玄)

無窮会図書館所蔵。神習文庫7013。写本一冊。23.5×16.0cm。青色十行野紙使用。朱が少々ある。白と灰色の横縞表紙。冒頭に「さりぬる弘化三丙午の長月、出羽の国山形専称寺へ法王の仰ごとつたへよと、おのれにものし給へば、とみにたびのよそひして、九月十一日金沢忽助、下男佐助をめしぐし出立けるに」とあるように、弘化三年九月、山形の専称寺へ法王の仰せを伝える命をうけ、二人の供を連れて十一日に旅立っている。江戸から日光街道を通り、桑折、金山峠から山形に向かう。その後、名取川から仙台、松島に行き、白河の関を経て湯毛、帰りに日光登山をしている。考証などは特になが、素直な記述で旅の日常をよく伝える。また松島付近では、冬季の旅のつらさが描かれている。

板 坂 耀 子

北陸紀行(高橋克庵)

板本一冊。安政四年。江戸より新潟に至る。漢文で、日を追って記し、足利学校、伊香保などを訪れる。草生水、与板、吉田、赤塚、内野などを経て新潟に着く。挿絵あり。記事は具体的に面白く、従僕が足を怪我して馬を雇ったことなど、旅の様子がよくわかる。しばしば友人を訪れて交流している。

北越七奇(長久保赤水)

「日本儒林叢書」三所収。「東奥紀行」の付。寛政四年刊。黒川村の臭水、柄目木の火井、小島村の八房梅、安田の三度栗、島屋野村の逆折、野積村の即身仏、柿崎村の燃土、の七奇について調査したもの。説明は具体的に、図も交えて詳しい。漢文。

北越旅記(中村英)

無窮会図書館所蔵。神習文庫6782。写本一冊。26.2×18.9cm。十三行書で九十三丁。朱色表紙。左肩白題簽。名所図会風。美しく詳細な挿絵が多い。「東鑑」や「太閤記」などの引用文や考証が非常に長い。簡単な部分は極めて簡単に記す。文化十二年の自序の他、十三年、十四年の序がある。自序によると、もともとは五巻であったようである。あるいは末尾は未完か。蕨、浦和、倉加野、伊香保、といったあたりの記事が詳しい。板本の写か、板行を計画した稿本であろう。

正直先生記行(三好清房)

「サ行」の項目を見よ。

松島案内(岡濯)

明治二十一年刊。宮城県立図書館所蔵。KM292-マ8。白に藍色の草模様表紙。左肩緑題簽。名所図会風の筆致で松島を紹介する。冒頭で同地をナイアガラに比したりしている。芭蕉のことに特に触れてはいないが、松島の様子の描写に「舞フガ如ク(略)坐スルガ如ク臥スガ如シ」などと、芭蕉の文体をしのげるものがある。

松島案内記(寺田能円)

文化八年刊。京都大学附属図書館所蔵。十行書。七丁。短い作品で、一つ書にして、松島の由来や名所を説明する。芭蕉の句碑のことあり。風景描写などはない。

松島往来(燕石斎薄墨)

宮城県立図書館KMマ1、マ2など刊本多し。文化十三年刊、天保四年板もある。冒頭に図絵あり。以後は上段に絵と歌を記し、本文は往来物の体。「塩釜路から思い立」と、つ、ぢから始まって、末松山、壺石碑などを見て、松島に参詣し、平泉から象潟に至る。特に松島以後は「おくのほそ道」の文章をよく使っている。

松島紀行(林叟・一堂)

東北大学附属図書館所蔵。写本一冊。寛政八年奥書。肩肘張らない、さらさらとした筆致で記す。句もあり、芭蕉を引用している。放し飼いの馬、老人二人が入っていたままの穴、など珍しい記事も多い。松島の風景描写あり。江戸から平泉までの旅である。

松島紀行(半井行蔵)

宮城県立図書館KM292-マ7。板本一冊。26.8×18.2cm。海老茶色表紙で左肩白題簽。寛政九年跋。末尾が切り取られて刊記はない。寛政八年、仙台から松島に行った漢文紀行。冒頭に松島が名所として知られることを記す。また、自分が子ども扱いされて遠出を許してもらえなかったことを記す。内容は松島が中心で、行程が短い分、記事は詳しく、描写も細かい。ただ全体が短いため、さほど珍しい記事はない。

後半は漢詩が多い。

松島紀行(歎阿翁)

福島県立図書館所蔵。写本一冊。享保年間。「卯月末の二日、暁、むかふ寺より発して此所より雨に逢ふ。ともなふ人ひとりふたりおかしげに立出て、雨いたく降れとも物ともせず、笠の端かたぶけて出ぬ」とはじまるが、記述のしかたは名所図会風。項目をあげて説明する。白川から出発して松島近辺を巡る。具体的で丁寧な描写である。末尾の紫竹堂主人の跋に「延享年間、服部何がし」の作とある。奥書はその後に弘化三年の写と記す。佐藤兄弟についての記事が詳しい。

松島寿頌(協蘭室)

「協蘭室全集」所収。文化八年。漢詩と和文とがある。豊後の鶴崎に住む作者が、速見の海辺に暮らしていた母を鶴崎にひきとった後、ここは海が見えないので母が淋しかろうと、東から帰った人の本物そっくりという松島の絵を障子に写して見せたもの。更に母の誕生日の祝いとして、知人が集った時に詩文を寄せたものである。

松島諸勝記(如幻夢庵)

「仙台叢書」四所収。享保元年序。漢文。五大堂からはじめて、各建物を中心に、松島の名所の由来を詳しく記す。風景描写や個人的記事はなく、紀行文とはいいいがたい。

松島巡覧記(相原友直)

「仙台叢書」二所収。安永七年自序。宮城県立図書館に井上可基の大

正六年の写本がある。「塩釜巡覧記」よりはかなり長い。各建物や島の由来を記し、説明を加える。重々しい正確な文体である。歌や漢詩も多く収め、見物上人のこと、市店やみやげものものことも記す。知識を知るには役立つであろう。

松島図誌(桜田質)

宮城県立図書館所蔵。KM292-マ6。青色表紙。左肩白題簽。23・1×15・6cm。文政四年刊。仙台伊勢屋半右衛門他三肆の刊記。風景描写あり。記事も多彩で面白い。名所図会の類といっている。

松島船中(作者不明)

宮城県立図書館所蔵。KM913-マ2。板本一冊。9・8×17・2cm(横本)。茶色表紙。左肩打ち付け書。七丁。長洋、布三、五江、常女、一艸、巨濤、一花など多数の俳人の連句を集めたもの。

松島眺望集(大淀三千風)

「仙台叢書」一所収。板本。天和二年。さまざまな人の、松島についての漢詩文や句を集めたもの。壺の碑のことなどが出る。めりはりの強い古風な漢文調の文章が多い。

松島日記(伝清少納言著、伊勢貞丈注)

東京大学附属図書館本居文庫所蔵。写本一冊。風景描写などはない。

遊松島記(細井平州)

「仙台叢書」六所収。作者が十八才の折りの作か。漢文紀行。冒頭に

松島が名所であることを記す。風景描写が多い。米沢から丹泉を経て松島に赴く。その後、名取熊野の祠に行き、その老女に会っている。錦戸太郎のことや、福島医王寺のことも少しある。大沢、羽黒を経て帰る。末尾に喬卿がこの紀行を誉めて「遊記之作、多く瑣辭に失す。山水色無く、人の欠伸を惹くのみ。此の記、簡にして詳悉す。泉石皆動く。以て記勝の最とすべし」と言ったとある。

松島のみちの記(只野真菫)

昭和六年の活字本「真菫がはら」所収。享和三年成。松島周辺にしばらく記述。作品は短い描写は細かく、平四郎の伝説のことなども出る。

松島夜話(性空)

「仙台叢書」七所収。漢文。瑞巖寺第七世の性空の随筆。特に松島に限った記事ではなく、紀行文でもない。

松島旅行日記(たみ)

宮内庁書陵部所蔵。「片玉集」六十七の内。作者は水戸家司の妻。水戸から出発し、松島を見て帰る。宝暦七月八日から二十七日までの旅。芭蕉についての記事は特にない。筆致は明るく、周囲の風物をよく描写し、松島の風景も丁寧に記している。ただし暑さに疲れて、しばしば筆を省いている。

みちのく紀行(昌始)

宮内庁書陵部蔵。写本「片玉集」のうち。「おは君の仰をかふりて」寛政四年八月に、江戸から松前に赴いた時のもの。君命の重さを意識し

つつも、みちのくの名所を訪ねる喜びが大きい。那須、白川、塩釜、武隈の松、野田の玉川、宮城野、最上川、壺の碑、三馬屋、などと型通りの名所が登場するが、特筆するほどの記述はない。しかし、くせのない和文の簡明な記述で、旅の様子を描いていて、読みやすい。末尾に津村正恭の、壺の碑についての短い考察が附される。

みちのく紀行(釣月)

東京大学附属図書館所蔵。J26-11064。写本一冊。紺色表紙。左肩白題簽。23・3×15・8cm。九行書。五十七丁。外題「みちのく紀行」。享保二年に作者が記したものを同九年睦月十七日に俊理が写したという奥書あり。江戸から日光を経て白河の関を越え、福島や仙台を通って松島に至る。帰途は笠嶋のことが詳しく、二本松では文字摺石についても記している。「おくのほそ道」の影響は特にならない。土地の風俗について、少々記す。結構詳しく、穏やかな筆致である。

みちのく紀行(作者不明)

宮内庁書陵部蔵。写本二冊。文化四年六月、同年四月に訪れたロシアの動向を調査するため、幕府の命をうけて、松前に赴いた時のもの。和歌も交えて、平明な和文であるが、描写は具体的に細かく、中途の風物や、旅の様子をよく描いている。渡海して、オシヤマンベ、レブンゲなどにも行っているが、その部分は少なく、みちのくについての記述が大半を占める。幕藩体制への賞賛の記述も散見される。

陸奥紀行(春秋庵宜俊)

東北大学附属図書館狩野文庫所蔵。写本一冊。寛政八年、弟子の良ト

写の奥書がある。挿絵は坂口員正。明和六年五月一日、「みちのくの名所を見んと」一、二人の供をつれて江戸を出発する。越谷、栗橋、小金井、宇都宮、白沢から白河、須賀川、郡山を通って仙台に至る。武隈の松、二本松を通って那須野、太田原、窪田から浅草へと帰着する。後半に図絵を集めている。和歌が多い、文章はそれほど長くはなく、あっさりとした記述だが旅のさまがよくわかる。

陸奥塩釜一見記(宗因)

「校註俳文学大系」紀行編所収。延宝七年成。勿来の関から仙台を経て松島に至り、白河を通って江戸に至る。後半は連句。風景描写は少々あるが、全体は非常に短く、簡単な作品である。

陸奥つれぐ草(大原幽学)

「大原幽学全集」所収。天保七年。作者が友人たち五人と松島や野田の玉川を見て、日光に参詣し、松沢村に帰る奥州紀行で、気どらない文体で、よく旅の実態を描く。しばしば文体が「膝栗毛」調になり、友人や土地の人々との滑稽なやりとりを、会話まじりに記す。松島の描写が少々ある。全体の筆致は冷静で具体的である。

陸奥日記(小津久足)

慶応大学附属図書館所蔵。240-23813。写本三冊。24・3×16・8cm。茶色帙入り。表紙は白地に紺色の兎の正面模様。左肩貼題簽。江戸から出発して浜街道を通じて、潮来や銚子に行き、鹿島と筑波に参詣して水戸に至る(第一冊)。水戸を出発して、仙台、松島を

訪れ、宮城野を通過って再び仙台に戻る(第二冊)。白石から郡山、三春から那須野に行き、日光に参詣、日光街道を経由して江戸に戻る(第三冊)。冒頭から、ゆったりとしたペースで、丁寧に記している。説明がしっかりしていて、わかりやすい。描写も細かく、面白い。「この磯辺には蒲公英初紫など、おほく花さけり。この初紫は、わが伊勢の国ちかき志摩国の海辺の外にはなきもの、よし、本草家といふがいへりしことありしが、すべてよに本草家といふものはゆかずして名所おしきはむるたぐひにて、おほかたは書のうへにてあなぐりもとめつ、おしきはむる説ともなれば、かゝる僻説もいでくるなめりと、今さらおかしくおぼゆ」などとの記述もある。三月二日の部分で益軒を引用し、他にも先行紀行をよく読んでゐる。末尾には「紀行は雅文漢文のめでたきよりは俗にちかきがみちしるべとなすにはたよりよく、貝原翁が諸州めぐりのたぐひを記行の第一といふべし」などの紀行論があり、みちのくの旅の特色についても述べている。すべてにわたって行き届いて面白く、近世紀行の代表作の一つであろう。

陸奥日記(央斎)

国会図書館所蔵。写本一冊。文政元年。魚澄子璞の序がある。「やよひ七日、みちのくへ下る人にさそわれて」江戸を出発、日光街道を通過って白川、福島、仙台、松島から平泉に行き、盛岡、七戸、野辺地、三馬屋から松前に至る。帰途は出羽三山に行きたがったがあきらめて、ほぼ同じ行程で六月六日に江戸に帰る。盛岡では葛の葉の芝居のこと、福島では蚕や紅花のことなどがあり、松前滞在の記事も詳しい。末尾に友人たち数名の歌を記す。記事が豊富で面白く、東北紀行の傑作の一つである。

陸奥日記(作者不明)

東北大学附属図書館狩野文庫所蔵。写本二冊。文政元年。第一冊は絵が多い。蝦夷人、黒百合の花、蚕など。みちのくの各地の風俗を順不同につづつてある。文字擅右の絵もあって「奥羽行記」では読めないといった文字もすべて記してある。第二冊は日付にしたがって記している。松前に関する記事が多い。六月六日に江戸に帰る。他の紀行にはない、独特の珍しい記事が多い。

宮古紀行(建部巢兆)

「南部叢書」六所収。写本。寛政十二年。非常に短く、数葉に過ぎない。七月末から八月にかけて、大迫のあたりに滞留したときのもの。発句と短い文から成り、ほとんど、紀行文とも言えない短さである。記事は八月十五日前後が中心である。

盛岡紀行(下村佐助)

「南部叢書」六所収。主君が故あって盛岡に配流されるのに従った家臣の一人の作品。江戸から出発し、遊行柳、白河、浅香山、錦戸、仙台、松島、一関を経て盛岡に至る。漢詩、和歌を交えた短い紀行文であるが、見聞するものに、それとなく昔の幸せや、今の身の上を反映させて、味わいふかい記述が多い。

遊米酒都登(作者不明)

宮城県立図書館所蔵。KM290-Y1。写本一冊。八行書。四十四丁。27.5×20.0cm。仮綴り。共表紙。左肩打付書。「菊田氏蔵書証」印あり。五十才ほどの人が友人と二人で旅しており、途中で酒を

よく飲んで楽しげである。風景描写がよく、夜の松島の様子が美しい。人々との交流の描写も、具体的ですぐれている。鹿のことなど面白い記事がある。挿絵もある。字はやや読みにくいだが、内容は豊富で佳作の一つである。

万覚帳(松館幾右衛門)

宮城県立図書館所蔵。KM2901ヨ1。写本一冊。8.3×19.9

cm。五十九丁。寛政六年。江戸から盛岡までの行列のメモ帳ともいべき道中日記である。

(なお、以下は「国書総目録」に見える東北・北陸地方の紀行文と思われるもので、私がまだ見ていない作品である。)

江戸ヨリ南部マデ道中記(作者不明)

写本一冊。

江戸秋田間道中日記(作者不明)

写本一冊。

荏野翁越路日記(山崎弘泰)

写本一冊。嘉永六年。

荏野草稿・乙亥浪華行(田中大秀)

写本一冊。天保十年。

奥羽紀行(嵐亭・蝶羅)

板本。二巻。明和六年。

奥羽紀行文(作者不明)

写本一冊。

奥羽行(植田勝応・長沢茂好)

写本二冊。文化四年。

奥羽行(安田以哉坊)

板本五冊。明和二年。

奥羽細遊雜記(橋辰年)

写本三冊。

奥羽道の記(京城孫四郎)

写本一冊。

奥羽道中日記(飯山佐兵衛)

写本一冊。文政四年。

奥羽相馬妙見祭礼並塩釜松島一見旅中日記(平岡道久) 写本一冊。

奥の紀行(琴風)

写本一冊。

奥の菅笠(作者不明)

写本一冊。

奥遊日録(中山高陽)

「中山高陽紀行集」所収。

奥遊日録(高橋中行)

写本一冊。寛政十年。

奥廼志留篇(松枝兵衛)

写本一冊。嘉永三年。

奥の松かぜ(大橋並八郎)

写本一冊。寛政五年。

御道中記(淀川東市)

写本一冊。

開道北征録(佐藤西山)

写本一冊。安政五年。

加州下道中記(西村宗七)

板本一冊。嘉永四年。

観楓唱和詩遊方録(吉川堅)

写本一冊。

- 紀行魚品（作者不明） 写本一冊。
- 北ちどり（南部利謹） 写本一冊。
- 金華遊（斎藤鑒） 写本一冊。
- 甲申旅日記（前田知頼） 写本一冊。
- 庚戌北遊記（沢田宗堅） 寛文十年。
- 越谷行脚（作者不明） 板本一冊。
- 越路日記（大村光枝） 写本一冊。
- 越路日記（田中大秀） 写本一冊。
- 越の名残（各務支考） 三卷三冊。宝永六年。
- 越の道杆（作者不明） 写本一冊。
- こしの山婦美（真竜院） 写本一冊。
- 信夫伊達両郡巡郷記（南合義之） 写本一冊。「鶯宿雜記」346冊。
- 莊内江戸間旅行記（作者不明） 写本一冊。
- 莊内江戸奥道中記（作者不明） 写本一冊。
- 信州紀行（稲垣萱堂） 写本一冊。
- 仙北紀行（作者不明） 写本一冊。
- 壺石文（菅雄） 写本三卷三冊。
- つばのいしぶみ（栗田士満） 写本一冊。文政十年。
- 敦賀紀行（足代弘訓） 写本一冊。
- 東越日記（光沢） 写本一冊。天保九年。活字本（大正九年）あり。
- 東奥紀行詩（船橋隨庵） 写本一冊。
- 東奥遊覧（平野宗誠） 写本四冊。嘉永二年。
- 道中記（作者不明） 板本一冊。
- 東北紀行（作者不明） 写本一冊。
- 東北遊日記（月性） 写本一冊。
- 南部行日記（真田和兵衛） 写本一冊。文政四年。
- 西山宗因陸奥行脚ノ記（宗因） 一卷。
- 能州日曆（宝田敬） 「加賀能登郷土圖書叢刊」所収。
- 濃北紀遊（江村綏） 写本一冊。「天香桜叢書」七十二所収。
- 能登浦伝（浅加久敬） 「加賀能登郷土圖書叢刊」所収。
- 能登紀行（作者不明） 写本一冊。
- 能登紀行（村上珍休） 「加賀能登郷土圖書叢刊」所収。
- 能登州遊記（作者不明） 写本一冊。
- 能登日記（田辺政己） 「加賀能登郷土圖書叢刊」所収。
- 八郎瀉紀行（作者不明） 写本。
- 懷日記（谷文晁） 写本一冊。文化四年。
- 北越巡覧記（作者不明） 写本一冊。
- 北行日記（粟津元隅） 写本一冊。
- 北行日譜（羽倉用九） 写本一冊。
- 北国道記（風車軒） 写本一冊。安永六年。
- 北国路之記（仙果亭嘉栗） 板本一冊。
- 北州紀行（葛巻昌興） 写本一冊。元禄五年。
- 北壤記程（加子遠） 写本一冊。
- 北征日誌（馬場正通） 写本一冊。享和元年。
- 北征日曆（松岡敏） 写本一冊。安政四年。
- 北展記事（宮本鴨北） 写本一冊。
- 北遊記（秋葉友右衛門・奥谷新五郎） 写本一冊。
- 北遊記（小宮山楓軒） 写本三冊。
- 北遊乘（菅野潔） 写本。
- 北遊藁（作者不明） 写本。安政三・四年。

北遊稿(守屋惟質)
 北遊日記(百忍庵常悦)
 北遊日記(小野寺篤謙)
 北遊月礼(作者不明)
 北陸紀行(葛巻昌興)
 北陸遊稿(山口凹庵)
 松島紀行(宗因)
 松島記(曾良)
 松島紀行(朴斎道也)
 松しま記行(作者不明)
 松島紀行(佐々木泉明)
 松島行記(楠本寛)
 松島象潟往来(作者不明)
 松浦嶋之記(伊達吉村)
 松島図(谷文晁)
 松島志(舟山万年)
 松島洲嶼真図(作者不明)
 松島摘藁(性空)
 松島手数附(作者不明)
 松島独行吟(晋堂靈南編)
 松島日記(新井大人)
 松島日記(泉崎真畔)
 松島日記(長島英斎)
 松島日記(作者不明)

その他数点。「国書総目録」には内容不明としてまとめて挙げる。

写本一冊。天保七年。
 写本一冊。
 写本一冊。嘉永六年。
 写本一冊。
 写本。元禄三年。
 写本・板本。二卷二冊。文化六年。
 写本一冊。
 「諏訪資料叢書」九所収。
 写本一冊。
 写本一冊。
 写本一冊。明和六年。
 写本一冊。
 写本一冊。
 写本一冊。
 一帖。天明七年。
 写本十七冊。明治時代の刊本の写。
 五軸。
 写本一冊。
 写本一冊。
 板本一冊。
 写本一冊。
 写本一冊。文政七年。
 写本一冊。

松島の日記(作者不明)
 松島の夢(吐月)
 松島道記(日念)
 松しま道の記(蝶夢)
 松島名所文章(作者不明)
 松島遊記(徳雨)
 道のおくのにき(平岡某)
 みちのく日記附図(作者不明)
 陸奥日記(柏声舎卓池)
 陸奥日記(伊能頼則)
 みち奥日記(巴凌・二日坊)
 陸奥乃道の記(作者不明)
 宮城野遊覧之記(伊達吉村)
 遊能紀行(中沢鴻)
 湯殿紀行附松島(無禅盤泉)
 和文奥羽紀行文(作者不明)
 写本一冊。
 写本一冊。
 写本一冊。
 写本一冊。宝曆十三年。
 写本一冊。
 写本一冊。宝曆十三年。
 写本一冊。
 写本二冊。文政元年。
 板本一冊。寛政三年。
 「増補紀行文集」所収。
 板本一冊。宝曆十三年。
 写本五冊。
 写本一冊。
 写本一冊。
 写本一冊。元禄八年。
 写本一冊。

(また、以下は各種の目録等に書名が見えるが、現存が確認できないものとして「国書総目録」が紹介しているものである。)

- | | |
|----------------|-----------------------|
| 越中紀行(田中朋如) | 国学者伝記集成 |
| 奥羽紀行(大乘) | 越佐名家著述目録 |
| 奥羽美留野志於里(古川辰) | 高木家地誌目録 |
| 奥羽旅行の記(作者不明) | 国書解題 |
| 塩釜松島紀行(井文圭) | 地誌目録等 |
| 塩釜詣の記(堀田正敦) | 諸大名の学術と文芸の研究 |
| 出羽物語(作者不明) | 国書解題・地誌目録 |
| 東北紀行(皆川良磯) | 旧三井鴉軒文庫目録 |
| 能登日記(醉月堂) | 高木家地誌目録 |
| 北陸駅路筆(八尾屋喜兵衛) | 加能郷土辞彙 |
| 北越行録(井上蘭台) | 近世漢学者著述目録大成 |
| 北陸行脚卷(心岩) | 加能郷土辞彙 |
| 松島一色両吟集(大淀三千風) | 俳諧書籍目録等 |
| 松島伽藍之記(虎哉宗乙) | 新纂禅籍目録 |
| 松島紀行(只野真葛) | 国学者伝記集成 |
| 松島紀行(三谷坦斎) | 近世漢学者著述目録大成 |
| 松島紀行(和気柳斎) | 近世漢学者著述目録大成 |
| 松島紀行手鑑(作者不明) | 高木家地誌目録 |
| 松島行記(作者不明) | 旧下郷文庫目録 |
| 松島眺望図(小野寺鳳谷) | 維新前に於ける管内出版図書(宮城県図書館) |
| 松島遠目鏡(藤原昌芳) | 国書解題等 |
| 遊松島富山記(富桐江) | 高木家地誌目録 |

- | | |
|------------------|-----------------------|
| 松島独案内(作者不明) | 維新前に於ける管内出版図書(宮城県図書館) |
| 松島風土記(作者不明) | 高木家地誌目録 |
| 松島風土記(作者不明) | 旧彰考館文庫目録 |
| 松島方言(桜田虎門) | 近世漢学者著述目録大成 |
| 松島宮城野十五首和歌(伊達慶邦) | 大日本歌書綜覧 |
| 松島名所(作者不明) | 江戸出版書目 |
| 松島名勝記(相原友直) | 旧下郷文庫目録 |
| 松島名所記(作者不明) | 旧彰考館文庫目録 |
| 陸奥紀行(三輪某) | 旧彰考館文庫目録 |
| 陸奥日記(寺西元水) | 旧浅野文庫目録 |